



特定非営利活動法人

ヒマラヤ保全協会

## 第 14 回 山岳エコロジースクール報告書

～ヒマラヤ・トレッキングとネパール山村のホームステイ～

テーマ「山の暮らしから学ぶエコロジー」

## 目 次

I. はじめに.....	3
II. ネパールの概要 .....	4
1. ネパールの歴史.....	4
2. ネパールの外交.....	5
3. ネパールの経済.....	5
III. 援助 .....	6
1. 外国援助.....	6
2. 日本の援助.....	6
3. 援助の理想のかたち.....	7
4. JICA の援助 .....	7
5. 援助によるプラスな結果.....	10
IV. 他国との比較.....	10
V. ボランティアとは .....	11
VI. スクール日記 .....	12
VII. 参加者の感想 .....	30
1. 「関心」が地球を救う.....	30
2. 「出会い、心が通じ合う喜びを実感できた旅」 .....	32

## I. はじめに

2007年12月21日から2008年1月4日にかけて、第14回山岳エコロジースクールを開催しました。今回はパルバット郡サリジャ村を訪問し、この村でのスクールの開催は今回がはじめてでした。



サリジャ村の人々とともに

サリジャ村は、ヒマラヤ保全協会が2005年度からあらたに事業をはじめた地域であり、今回の「ポカラ→ナヤプール→ブンヒル→サリジャ→ベニ→ポカラ」のルートは、スクール（スタディツアー）としてははじめてのルートであり、かなりきついものでしたが、大変みのりの多い体験となりました。

サリジャ村ですすめている事業は、自然環境を保全するとともに、森林資源を活用しながら住民の生活改善をすすめ、地域社会を活性化させることを目的にしています。現在は、これまでに建設した苗畑の苗木生産能力を一定水準まで向上させ、植林地への植樹を軌道にのせ、住民の主体的参加による、苗畑の自立運営、持続的・継続的な植林・森林管理をすすめています。また、織物施設（イラクサ加工施設）および紙漉施設（ロクタ紙加工施設）の建設をすすめ、織物事業および紙漉事業を開始し、またその経営を軌道にのせ、住民の収入向上をはかっています。これらを推進するために、苗畑管理人・森林委員・現地住民に対して、森林資源の利用、換金作物の育成、森林経営、事業運営、マネージメントに関するトレーニングもおこなっています。

サリジャ村の皆さんは、私たちをととてもあたたかくうけいれてくださり、また村の生活を通して、自然と人間とが共生することの重要性をまなぶことができました。ここに、サリジャ村の皆さんにあつく感謝の意を表します。

## II. ネパールの概要

(K. Y. 記)

### 1. ネパールの歴史

- a 紀元前 聖人ナイア・ムニがカトマンズの谷を乾かし、子孫に住ませたことにはじまる。
- 前6c インドと交流があり、仏教はネパールから広がった。
- 前3c インドのアショーカ王がブッダの生誕の地である南ネパールに巡礼を行う。
- b 4c～15c
  - 4c リッチャヴィ王国成立。  
チベットと文化的、経済的、政治的の密接な交流があり、宗教、商業上の中心として繁栄。古代ネパールは、インドからヒンズー教と仏教、四姓制度を取り入れ、行政機構、税制や地方制度も備える。盆地では灌漑農業が行われ、工芸の発達も窺える。
  - 7c 後半、チベットに亡命した後、その助力で位についたネパール王の軍勢が、唐・チベットとともに北インドに攻めた。
  - 10c マッラ王朝統治。
  - 1450 3王朝に分裂。
- c 18c～19c
  - 1768 プリトゥビ・ナラヤンがグルカ勢力を率いて、ネパールを統一し、現王朝（シャー王朝）をつくる。
  - 1814～グルカ戦争。  
イギリスと三度にわたる戦争の結果敗北。かなりの領域をイギリスに奪われ、現在の国境となる。敗戦の結果、イギリスの保護国となり、兵舞台をイギリスに提供することが義務となる。インド独立後は、英印両国に毎年、兵を提供。
  - 1846～1951  
ラナー族出身の宰相による支配。
- d 20c～
  - 1951 立憲君主制を宣言。
  - 1956 日本と外交関係を樹立。
  - 1990 国民主権をうたった新憲法制定。
  - 1996 ネパール共産党毛沢東主義派（マオイスト）が王制を打破すべく、反政府活動が活発化。
  - 2001 ネパール王族殺害。政変により議会停止。  
武力のない議会派に力はなく、国軍を掌握する国王派とマオイストによる内戦が続く。アメリカは、国軍を支援。農村部へ自衛用に武器を供給などしているが、武装した農民がマオイストと合流するなど混乱に拍車をかけている。
  - 2004 イラクで労働者が武装勢力に殺害。政府が買い労働者保護を怠ったとして市民が暴動。
  - 2004 再度の議会内閣停止。絶対君主制を導入。非常事態宣言。  
国王と政党の溝が深まる一方、政党とマオイストは連携し、抗議開始。
  - 2004 抗議に対し、国王は、政党に首相推薦を要請。  
ネパール政府は、国連に対して書簡提出し、国連が和平プロセスに関与していく方向性が定まっ

た。

ネパール政府とマオイストは選挙の自由且つ、公正な実施の為、国連が国軍及びマオイストの武器管理の監視を行うことなどに合意し、紛争終結を含む包括的和平に署名。

2007 国連ネパール支援団 (UNMIN) を設立する決議を全会一致で採択。日本も同ミッションに自衛隊員 6 名を軍事監視要員として派遣。

暫定政府発足。

国王は国家元首としての地位を事実上失い、当面は首相がその地位に着くことになる。今後政体は制憲議会で決定される方向だが、象徴君主制として王制維持したい民主派諸党と共和制移行を望む過激派の共産党毛沢東派の間で意見対立。国号は、ネパール王国からネパールに変更される。王室をたたえる国歌を廃止し、王室を結びつけたヒンドゥー教は国教としての地位を失った。国王は統帥権を失った。

## 2. ネパールの外交

伝統的に非同盟中立。

対インド：内陸国であり、インドからの物資輸送への依存度が高く、インドとの友好関係は重要。

対ブータン：1991 年以降難民問題が存在。

対南アジア：南アジア地域協力連合 (SAARC) で地域推進に力を入れている。

対日本：皇室との関係もあり友好。2000 年は、森総理は、日本の総理として初めてネパールを訪問した。2006 年は、日本ネパール国交樹立 50 年をむかえた。

◎ 日本からの直接投資：約 14.9 億円

◎ 援助 (累計)

有償資金協力：2006 年まで E/N ベース 638.89 億円

無償資金協力：1724.32 億円

技術協力実績：2005 年まで JICA 経費 529.17 億円

◎ 主要援助国：1 位イギリス、2 位日本、3 位ドイツ、4 位アメリカ、5 位デンマーク

◎ 日本人入国者：1997 年は 41,070 人、しかし治安が悪化し、2005 年は 14,478 人

インド、イギリス、アメリカに続き 4 位

◎ 在留邦人数：450 人

◎ 在日ネパール人数：5,929 人

◎ 1999 年には、1899 年に僧侶の河口慧海が日本人として初めてネパールを訪問してから 100 年

## 3. ネパールの経済

GNP 国民総生産：160 \$ (日本 30,000 ドル/1 年)

GDP 実質成長率：-0.6% (2001 年)、2.7% (2002 年)、3.3% (2003 年)、2.0% (2004 年)、1.9% (2005 年)

主要産業：農業、カーペット、既製服、観光 (9 割は農業に従事している)

◎貿易 対日輸出 746 万ドル 2004 年

対日輸入 3,617 万ドル

主要品目 輸出 既製服、カーペット

主要輸出先は、インド、アメリカ、ドイツ

輸入 石油製品、糸、化学肥料、輸送用機械など

主要輸入先 インド、シンガポール、スイスなど

◎概況 農業以外では、観光業と繊維加工業が主力。特に観光業は、重要な外貨獲得手段となっている。しかし、1996年以前は、取得外貨の20%を占めていたが、2002年マオイスト闘争が始まると10%以下減少した。

経済成長率は、2002年にはマイナスを記録したが、2003年には3.3%に回復。しかし、天候不順による農業部門の不振、輸出産業の不振により2.0%にとどまった。2005年には、前年度を僅かに下回り1.9%とされ、経済の低迷が長期化しつつある。

貧困割合は、2001/2002年度の38%から2003年/2004年度の31%に減少した。但し、地域・カースト、民族間で格差がみられる。

経常支出：国内の治安悪化により2001/2002年の11.5%から2003/2004年は12%に増大。

経常収支赤字は、出稼ぎ送金の増大により、2001/2002年の4.3%から2003年/2004年は2.4%に縮小した。

### ◎産業

主な産業は、農業である。GDPの約4割。米、小麦、トウモロコシ、ジャガイモ、ジュートなどが主である。それ以外の産業では、繊維業と観光業が主である。

\*ヒマラヤ山脈を利用して水力発電が行われ、ネパール発電量のほぼ全てが水力による。

## III. 援助

### 1. 外国援助

主要援助：1. イギリス 2. 日本 3. ドイツ 4. アメリカ 5. デンマーク

日本は、1980年以来、1988年を除いて、対ネパール最大のODA供与国。

\*2000年の対ネパール援助実績：日本（9,990万ドル）、デンマーク（2,500万ドル）、イギリス（2,300万ドル）、ドイツ（2,180万ドル）。

デンマークは、重要分野として、「教育」「環境保全・自然資源管理」「ガバナンスの改善と民主化」をあげている。イギリスは、「ガバナンスの改善」をあげ、「人間開発への良いアプローチ」「農村生活へのアプローチ」を重視している。ドイツは、農村開発を重点とし、全てのプロジェクトで貧困削減を目標としている。

### 2. 日本の援助

日本の援助の理念とは

- A 日本は世界2位の経済大国であり、援助することは日本の当然に任務。
- B ネパールの社会問題の解決は、南西アジアの安定に不可欠。  
南西アジア地域全体の政治的安定の確立と社会開発の促進に大きな意義がある。
- C 伝統的に日本とネパールは友好関係がある。友人をたすけるのは、道義的義務。

日本の援助

- A 社会セクター改善（教育、水供給、保健・医療、母子保健など）。
- B 農業開発。
- C 経済基盤整備（電力、道路、上水道、防災など）。
- D 人的資源開発。

E 環境保全(都市環境問題、森林保護など)。

#### ◎ 短期的援助

農業の生産性をあげ、作物の多様化や農産加工業の振興流通システムの整備などを通じて、村落住民の所得を増やすことが課題である。同時に、住民の教育・保健衛生などの改善により人々の潜在的な能力向上をはかる。

A 農業生産性の向上を通じた貧困地域の所得向上。

B 教育や保健・健康の改善を通じた人々の潜在能力の向上。

教育・保健衛生などの改善には、人口抑制効果も期待できるため、所得向上につながる。

C 村落振興事業を通じた参加型開発の環境づくり。

辺境地域ほど、計画と実施を担うべき人材が絶対的に不足しているのが現状である。

#### ◎ 中期的援助

短期的視点に加え、地域の特性に応じるのが必要。

A 換金作物などの作物の多様化。

B 農産物加工、非農業セクターの地場産業、零細企業育成。

C 流通インフラ整備による地域内外市場の拡大。

D 人材の育成。

#### ◎ 長期的援助

国際社会で生き延びるには、地域主体の開発に加え長期的取り組みが必要である。農業開発と農業所得の向上と消費の増加を図り、国内市場の拡大、民間製造業の発展と再投資好循環、税収の増大、公共投資の増大を呼び起こすとともに、持続的な経済発展への展開が必要である。

市場調査を通じ、外貨獲得産業(製造・観光・水力発電など)振興の基礎作りに着手するとともに、インフラ整備、公共支援機能強化が必要である。また、人材育成や森林保全、災害防止への措置を継続的に推進する必要がある。

### 3. 援助の理想のかたち

◎ 貧困地において、地域のニーズと実態にあった対策を、地域の自主性とオーナーシップのもとに実施するのが重要。

◎ 援助は停止するのではなく、混乱の中にあっても、人々は援助を必要としており、危険を最小限にしながら持続的に援助をするべきである。

◎ 直接に裨益する事業を優先し、青年層を生産的な活動に参加させ、可能な限り、ローカルスタッフを配置する。現地の組織を活動の主体におき、マオイストとある程度の接触・対話を維持するべきである。

◎ プロジェクトの効果について、厳しいモニタリングをし、透明性と分かりやすい効果を追求することが必要である。成功事例を積極的に広報するとともに、過去の教訓をも生かすべきである。

◎ 他のドナーと協力。NGO、地方自治、大学との連携と相互協力により、協力効果を高める。貧困層が参加する地域主体の開発を促進することが重要。

### 4. JICA の援助

貧困削減にむけて

A 社会サービスの充実と住民のエンパワーメントを通じた国民生活改善。

- B 農業生産及び普及の拡充による生活水準の向上。
- C 経済、社会インフラの整備による産業振興と国民生活の改善。
- D 持続可能な開発を通じた環境保全。

#### ◎ 経済・開発計画

農業中心から近代的経済への過渡期である。貧困水準以下の人口が約 4 割をしめ、かつ若年人口比率が高いため雇用問題の深刻化が予想される。また、工業化の進展は遅々としている。

産業面では天候に左右されやすい農業、治安悪化の影響を受けやすい観光業、そして都市化と経済近代化に伴って伸びる金融、運輸・通信などの産業の伸長に大きく依存しており、資金面では援助と海外送金によって支えられている。

悪循環に陥っているネパール経済をすぐに発展させる妙案はなく、農業の発展からはじめるという標準的な戦力を主眼とするはかはない。この際、単に農業技術だけでなく、市場的発想が重要である。農業所得が向上し国内市場が拡大すれば、それが製造業を発展させ、税収も増大し、投資資金も出てくる。製造業の発展は、当面、補助的な役割に限定されるが、将来の製造業主導型発展の準備を怠るわけにはいかない。

#### ◎ 文化・社会

様々な文化・社会・言語・宗教的背景を持つ多くの民族やカーストが居住する。

現在のネパールは3つの対立軸がある。

- A ヒンドゥー対ヒンドゥー以外
- B 高カースト対低カースト
- C 山地対タライ

開発のイメージは、自ら参加するものというよりも外部からもたらされる建物や設備という含意が強くなっている。開発課題のうち克服すべき側面としては、カースト的社会関係、勤労尊重観念の低さ、地についた創造（想像）性の不足、コネの問題などがある。一方、振興すべき面としては、諸民族の文化運動を把握し相互交流を奨励することにより、優れた文化を保護・振興し、文化的多様性に根ざしたネパール文化を形成する方向性があげられる。

#### ◎ ジェンダー

ジェンダーの関係性の改善や女性が直面する状況の改善を促進することが欠かせない状況である。ジェンダーの理解、女性の参加、女性のエンパワーメントが様々なシーンで必要である。

#### ◎ 農業・畜産業・水産業

ネパール政府は、農業・水産・畜産業を国家経済の基軸として位置づけし、主要穀物の完全自給達成、地域格差の是正及び貧困農家対策を主要目標にその開発政策を推進してきている。しかし、基盤整備の脆弱、生産技術・技能水準の低さ、困難な地形環境に加えて、市場システム、土地制度そして金融制度などの政策上の問題点、あるいは公務に携わる人的資源の不足が農業生産性の向上を妨げている。

展望計画では、基盤整備、灌漑・肥料、技術の開発による農業生産物増産、貧困層撲滅と雇用機会の拡大、高付加価値農産物の導入と作物多様化の実現を目標としている。開発計画としては、農業を基盤とした産業の基礎育成、環境への配慮、農業開発への女性参画などを掲げている。

食料増産と自給率達成は主要課題であるが、農業政策のみで解消できるものではなく、教育システム、家族計画、輸送、地方行政など広範囲な協力関係によって取り組む必要がある。また、農民がある一定の生産技術・技能を有し、かつ農業に真摯に取り組んで良質な農産物を生産し、市場経済へ組み入れることが必要



である。

#### ◎ 教育・人的資源開発

教育インフラは整備されてきたし、初等教育の無償化政策が開始されて以来、就学者数は増大し続けている。しかし、識字率（成人）は、40.4%、中等教育では31%が就学するに留まっている。男女の格差も顕著である。

期待された学習成果が達成されていない。これは、教員訓練の内容や教室での授業の効果に問題があると報告されている。

計画では、人材育成が目標され、教員の訓練と学校運営や地方教育行政の強化が課題とされている。主な課題は、就学率の向上と教育の質の改善が挙げられる。純就学率の向上には少数民族や低カーストの児童の就学が不可欠である。また、地方での教育活動の活性化には、地方教育行政と学校運営、地域住民の教育への参加が必要であり、開発効果が学校に直接反映されるよう、学校の状況にあわせた教育開発活動の実施が期待される。

#### ◎ 保健医療

乳児死亡率は出生 1,000 に対し 100 を超え、妊産婦死亡率も分娩 10 万に対し 500 以上と著しく高く、しかも人口増加率は 2.4%を前後している。また、女性の平均寿命が男性のものより短いという世界で唯一の国である。女性の生活環境は世界で最も悪い。

この背景は、貧困からくる食生活、低栄養、衛生環境の劣悪、保健医療設備・機材の不足・偏在による保健施設へのアクセスの悪さ、管理能力・制度の不備からくる人材の不適正配置、必須医薬品・機材の管理・保守不良、教育の欠如からくる住民の衛生知識、生活・習慣・ジェンダー無理解から来る女性の地位の低さの問題がある。

保健医療分野の開発には、

- A 医療政策・監視・評価・外国援助局の管理強化、
- B 人材開発と適正配置、
- C 施設運営管理の強化、
- D 飲料水・環境衛生、母子保健・栄養と人口・家族計画など、教育省・女性福祉省・森林省・国土水資源省・農業省など協力による開発政策が必要である。

#### ◎ 貧困・人口

貧困は低位経済・社会・人的開発から生じる。貧困問題は、厳しい自然状況、複雑な地政状況及び多様な地域・社会構造に影響される。貧困層は 4～5 割を占め、度合いは山間農村部の方が深刻である。

要因は、長年にわたる農業の不安定・低成長、未発達な他産業、社会経済的インフラの少なさ、人的資源形成に貢献できる社会サービスの欠如、機能しない行政、近代システムの構造や制度が未整備のまま崩壊しつつある伝統社会の仕組みなどがある。更に、人口増加率が社会福祉問題、食糧問題、職業問題などを誘発した。

また、開発の始まったネパールはゼロからの出発である。植民地から独立して国づくりをはじめた国とは異なる。ある程度の進展はあったが水準は低いし、地域間や性別間で格差もある。「程度」「格差」の両面で最貧国である。

現状から脱出するためには、灌漑・換金作物の導入、農産物の流通・加工である。その他、食料品加工業などの製造業、パシュミナ、カーペット、繊維・縫製などに関連する企業、農村エネルギー産業等の育成や登山・トレッキング、エコツーリズムなどを重視した観光の整備も重要である。

行政村及び郡レベルでそれぞれ連携し、村・郡議会との横の連携をはかりながら調整を行う。

#### ◎ 環境

森林資源は量的（森林面積の減少）、質的（有用植物資源の減少）に減少・劣化の方向である。対策としては、住民のより積極的参加推進のため、参加の意味と実利、日常生活と森林の密接な関係を理解・自覚させるための啓蒙・普及活動の浸透が必須である。次に、「誰のための援助か」を明確に認識すること。支援するグループ（NGO、ドナー機関）の立場、役割を明確にし、互いの協調・調整活動を推進する。

森林保全に住民の意識を向けることは従来の住民の日常生活意識 / 生活習慣の切り替え / 変換であり相当の困難と伴う。そこで若年層・女性・カー ストを超えた住民参加を図り、事業と森林との関係を計画と実行の中で実感させる。

#### ◎ インフラ・エネルギー

未だアクセスのない郡が全国 75 郡のうち 10 郡、郡庁へのアクセスのない郡が 17 郡もある。いずれの幹線道路も災害に対する安全度が極めて低く、自然災害が道路本体や舗装の寿命を短くしていることに加え、復旧までの間の道路交通遮断が国の経済活動に与える影響も無視できない状況にある。

#### ◎ エネルギー

商業エネルギー（石油・石炭・電力）が 12.7%、伝統的エネルギー（薪・農業廃棄物・蓄糞）が 87.3%と、伝統的エネルギーの割合が非常に高い。

乾季と右記の発電容量に大きな差があり、冬の渇水期にはインドからの電力を購入せざるを得ない状況 となっており、毎年 50MW 程度輸入されているものの、配電網の未整備により、十分な電力供給はされていない状況である。国内消費量は年率 7.6%で増加しているが、電化率は 15%、農村地域での電化率に至っては 5%と非常に低く、地域格差もある。送配電ロス率についても 25%と高く、非効率な送配電網、老朽化した変電設備といったテクニカルロス、および盗電、料金徴収システムの不備などノンテクニカルロスがその 原因である。

### 5. 援助によるプラスな結果

援助により以下の結果がでている。

- A 道路総延長は 624km（1956 年）が 15,305km(2000 年)まで伸びた。
- B 電話の回線敷設数は 8,703 回線（1975 年）から 153,782 回線(1997 年)へ 20 年間で 20 倍に増えた。
- C 灌漑開発面積は 5,200ha（1950 年代）から 200,640ha(1998 年)へ約 50 年間で 40 倍に伸びた。
- D 主要穀類生産量は 3,778 千トン（1974 年）から 6,465 千トン（1998 年）へ増加した。しかし単位面積当たりは変化していない。
- E 5 歳未満児死亡率は 314/1000（1960 年）から 107/1000 へ約 40 年間で約 1/3 になった。
- F 安全な水の得られる人口の割合は 1970 の 5.7%から 1990 年の 37.0%へ 20 年間で約 6 倍以上になった。

## IV. 他国との比較

- A 一人当たり GNP220 ドル（1999 年）は、世界で下から 12 番目にランクされる。下から 1 番目から 11 番目の国のうち、タジキスタンを除き全てアフリカ諸国。
- B 人間開発指数は 0.48 で世界 162 カ国中、下から 34 番目。バングラデシュは 0.47、ブータンは 0.477 であり、ともに指数の低い国に属している。

- C 貧困層の割合は 42%であり、南アジア諸国（バングラデシュは 35.6%、インド 35%、スリランカ 25%）のなかでも最低レベル。また、人間貧困指数でみると、ネパールは 49.7%でバングラデシュ 48.3、パキスタン 46.8%、インド 46.3%と比較しても最貧国である。
- D 乳児死亡率 75/1000（1999 年）は、パキスタン 84/1000、ブータン 80/1000 に次いで南アジアで下から 3 番目である。
- E 妊婦死亡率 539/100,000(1996 年)は南アジアで最悪。
- F 成人識字率(15 歳以上)は 1992 年の 25.6%から 2001 年には 40.4%まで改善されたが、南アジアで最悪。

## V. ボランティアとは

- ◎ 相互理解であり、「救援→復興→開発」と三段階となる。
- ◎ 活動していると様々なジレンマ、批判があり、明解な解答が出しにくい。だが、その活動が次に生きるものである。
- ◎ とにかくもっているものを差し上げる
- ◎ 人間が人間らしく扱われる社会を目指す。
- ◎ 人道の 4 つの敵 利己心、無関心、認識不足、想像力の欠如（他人の苦しみを自身の身におきかえる）
- ◎ 無い機能を惜しむより、持っている機能の強化をはかる。
- ◎ NGO は小さいが、小さいからこそ話し合いながら環境・開発などについて考えることができる。だが、課題もある。資本力・組織の無さと社会参加意識の薄さである。
- ◎ ボランティアは触媒である。化学方程式の中に触媒は入り込めないが触媒が無い限り化学反応はほとんど生じない。
- ◎ ボランティアは、現場で慎むべきであり、決して主人公でない。する側とされる側の心が一致するべきである。自身の考えを押し付けるのではなく、人の話を聞き、価値を認める。
- ◎ 文化は社会の基礎を構成するもの。文化のうえに、経済、政治、産業、教育がある。文化を軽視した開発教育は失敗する。
- ◎ 援助・金銭が多いと村人の生活を破壊する。
- ◎ NGO は民と政府の仲立ち。異なった価値観を異文化の人とぶつけあい、新感覚を学ぶ。自身の殻がはぎとられ、自身の成長にもなる。
- ◎ 自分の在りようは、人とのかかわりによって決まる。人とのどのような関係を結んでいくか。理論で証明できないので、行動するのみ。
- ◎ 人が生きていくのは、ただ長く生きることではない。それぞれの尊厳性をもつことができるのが重要である。
- ◎ 援助（与える）ことで、自身の弱さ、自身のことを知ることができる。＝与えられる。

## VI. スクール日記

### スケジュール表

日付	場所	プログラム	宿泊先
H19. 12. 21	成田→バンコク	移動（フライト）	サイアム・ビバリー・ホテル
H19. 12. 22	バンコク →カトマンドゥ	移動（フライト）→カトマンドゥ自由観光 →勉強会	フジホテル
H19. 12. 23	カトマンドゥ →ポカラ	移動（バス）→勉強会	ブンヒル・ゲストハウス
H19. 12. 24	ポカラ→ナヤプール →ウレリ	移動（タクシー）→トレッキング	ロッジ
H19. 12. 25	ウレリ→ゴレパニ	トレッキング	ロッジ
H19. 12. 26	ゴレパニ→ブンヒル →ラムチェ→ナンギ	トレッキング	宿泊小屋
H19. 12. 27	ナンギ→サリジャ	トレッキング→村での歓迎会	ホームステイ
H19. 12. 28	サリジャ	苗畑など事業地見学、植樹	ホームステイ
H19. 12. 29	サリジャ	収入向上事業地見学、村人交流	ホームステイ
H19. 12. 30	サリジャ	ホームステイ先での交流	ホームステイ
H19. 12. 31	サリジャ→ベニ →ポカラ	トレッキング→移動（タクシー）	ブンヒル・ゲストハウス
H20. 1. 1	ポカラ	勉強会→ポカラ自由観光	ブンヒル・ゲストハウス
H20. 1. 2	ポカラ →カトマンドゥ	移動（バス）→カトマンドゥ自由観光	フジホテル
H20. 1. 3	カトマンドゥ →バンコク→	移動（フライト）	機中
H20. 1. 4	成田	移動（フライト）	

## 12月20日

母と神戸空港へ行き、羽田空港へ向う。羽田空港からホテルへ向うのに、コストを考え、リムジンバスでなく電車を選んだが逆にマイナスとなった。疲労し、時間・金銭面でもマイナス。成田ビューホテルで、サラダ、春雨スープを食べて寝た。

## 12月21日

6:30 起床し、饅頭、お菓子を食べた。

7:35 ホテルシャトルバスで成田空港へ向う。車が入る出入り口から、検査があり、調査官がパスポート検査の為、バスに乗ってきた。待ち合わせ場所で待つ。

10:45 タイ航空 出発。

おかきとドリンク。

ご飯（タイ風ビーフ、ご飯、卵焼き、そば2色、マヨネーズ和えサーモン、ケーキ、パン）、  
サンドウィッチ。

15:45(タイ時間)7時間で到着。

タイは、蒸し暑く半そでで十分。Tさんを見失い、2,000円両替し、携帯に電話するがかからない。タイ空港の方に電話の利用の仕方を教えてもらうがかからなかった為、インフォメーションに連れて行ってもらい、アナウンスしてもらった。おかげでTさんに出会えた。そこからホテルまでタクシーで向かうが、王様の誕生日で2時間かかった。

SIAMBEVERLY HOTEL タイ料理（タイカレー、ガドガドチキン、フォー、とうふのショウガスープなど）とてもおいしい。20パーツ=600円。

22:00 寝る。

## 12月22日

5:00 起床 昼間、機内で寝すぎた為、2時間ごとに起きてしまった。

7:00 食事（ブッフェ おかゆ：そばろ入ったもの。米粒の形状なし、煮物：大根、人参、ヤングコーンが和風の味付け、サラダ）。

7:45 ホテル発 タクシーで30分をついた。新空港で、とてもきれい。

10:45 タイ航空 出発 ネパールへ。日本人の高齢者の旅行者が目立つ。みんな、トレッキングが目的のようだ。

ご飯（サラダ：りんご、ナッツのワインビネガー風味、ライス、白身魚、きのこソテー、煮物：大根、人参、しいたけ、パン、ロッチェ）。

窓からヒマラヤが見える。

13:00 カトマンズ到着。

30ドルでビザ申請。

2階建ての空港。バングラデシュ空港より静かで、現地の方がこちらに押し寄せてくる雰囲気はない。いろいろな民族がいるのか、顔にバラつきがある。女性も外出している。ゴミが目立つ。犬ばかりで猫がいない。

14:30 フジホテル着。日本語OKで、日本人のお客さんもいる。チャを頂く。かなり甘いので驚いた。

15:00 ホテル発。1万円を5,400ルピーに両替。

**メモ：**カトマンドゥ盆地

周りを5山に囲まれた盆地には、ネワール族が暮らし、独自の文化や芸術を育んできた。マッラ王朝時代にかマドゥと並ぶ王国として栄えたパタンやバクタプルなどがある。近代化がすすむカトマンドゥのまわりは、のどかな田園風景がひろがる。

15:10 タクシーでボダナートに向う。バングラデシュはリクシャが多いが、こちらはタクシーが多い。クラクションをならし、思うが促進んでいる。信号は機能しておらず、警察による手信号により成り立っている。

入場料 100 ルピー。

**感想：**日課らしく、みんな、右回りに歩き続ける。宗教が生活に溶け込んでいる。旗にお経。欧米人の観光客もおり、ストゥーパの周りには、お土産屋で囲まれている。鉄筋の建築物であり、レンガ造りがなくなっている。文明が失われつつあり、危険遺産にも指定されている。カトマンドゥのある地域は、文明に残す為、入場料をとり、そのまま残されている。石、アンモナイト、かばん屋、ハガキ屋。ひざまづいてお祈りする人、マニ車を回す人。スリはいないような、のんびりした雰囲気。お経が響き渡っている。

**メモ：**ボダナート

カトマンドゥの東。ネパール最大のストゥーパ（仏塔）があり、チベット仏教徒の主要な巡礼地である。中国によるチベット武力併合後は、チベット文化の中心地となっている。現在のものは、15世紀にイスラム教徒による破壊のあと再建されたもの。かつてはカトマンドゥとラサを結ぶヒマラヤ越えの交易が盛だった頃、チベットからの商人や巡礼者はここに立ち寄り、ヒマラヤ越えができたことを感謝し、帰路には旅の安全を祈った。タマン族の住む静かな農村であったストゥーパ周辺は1960年代から多くの亡命チベット人が住みつき、ゴンパ（僧院）、住宅、カーペット工場など建ち始めた。

必ず右方向にまわる。ネパール最大のストゥーパは、それ自体がマンダラの構造をなし、4層の台座は地、半円球のドームは水、四方を見据える目が描かれた部分と13層の尖塔は火、その上の円形の傘は風、先端の小尖塔は空という宇宙を構成する5大エネルギーを象徴。ストゥーパはブッダの悟りと仏教の本質を、台座＝瞑想、ドーム＝すべての煩惱から解放された無の境地、目の描かれた塔＝涅槃にいたるまでの13の段階として表現。ドームの下にある108の凹みには一つずつ仏像が彫られている。最下層の土台の壁は147面。それぞれの面に4 or 5備えられたマニ車には「オムマニペメフム」という真言が刻まれている。マニ車を回しながら真言を唱え、ストゥーパを右回りに回り続ける。

ストゥーパの北には寺院があり、大きなマニ車。これを回すと鐘がなるような仕組みの為、絶えず鐘がなっている。ネパール、ブータン、インドのチベット系住民が避寒を兼ねて巡礼にくるのは冬。

日が落ちるとかなり冷える。外国人も利用するカフェへ。500ルピー。

19:00 ホテルに戻り勉強会。

ネパールは標高50m（亜熱帯）から8848m（北極程度）までの気温差。ここだけで、多様な環境、民族、食生活を見ることが出来、地球環境を考える標準地域。国際協力は、開発教育などのイメージがあるが、地球環境も注目すべきである。

温帯は日本の気候に似ており、稲作（～1700m）もし、納豆もつくる。

ネワール族がカトマンズを支配していたが、ヒンドゥーの末裔が攻め込み、統一支配した。ヒンドゥーの割合は半数。それ以外の少数民族の中には、文字を持たない方々もいる。少数民族のチベット人は、蔑まされている。

民主化は進んでもユーゴと同じように崩壊する恐れもあるので 予断を許さない。

かつては、自給自足。しかし、貨幣経済が浸透し、子供に教育を受けさせようとする社会となった今、お金を稼ぐ手段を持っていなかった彼らの中には出稼ぎへ行く人も多い。日本は、就労を認めないが、アラブなど認可する国もあり、そうした国へ出稼ぎへ行く。また、イギリスなどの軍隊も高収入。どちらも、10～20倍の収入が得られる。公務員で月5,000ルピー、大学教授で10,000ルピー。それに比べ、出稼ぎは150,000円程度。2年に一度帰ってくる。出稼ぎを10年もすると大金持ちとなっているため、田舎に戻らず都市部に住む。こうした状況は5年前からで、それ以前は、飛行機は、空席もしくは観光客のみ乗客していたが、バンコク行きは出稼ぎへ行くネパール人が目立つ。また、大学卒となるとはホテルで働けることができ、高賃金を得ることができる。優秀な人ほど、都市部へでていく。お金を稼ぎ、子供に教育を受けさせようとするが、教育を受けても職がない…という問題もあるので、学校支援の援助団体はこうした問題も考えるべきである。日本のような工業産業もなく、先生か公務員という職のみ。カースト制度により、こうした職につけない人も多い。

- ・周期的に100年に1回大地震がおこり、耐震構造でないネパールは被害を受ける。
- ・氷河＝自然のダム。温暖化で氷河が水不足。
- ・こちらの人は、役割分担が明確で、officeワークの人はofficeのみ。また、個人主義の人も多い。大きな組織は作ることがむずかしい。
- ・誕生も死亡も家という病院にかからず一生を終える人もいる。

22:30 就寝。外は、うるさいほど、音楽が鳴り響く。

**感想：**文明が高まりつつも、制度が全く機能していない。だが、多くの民族が生活できているという不思議な国。教育レベルは高くないといけないと思っていたが、職がなく、受け入れる社会が整ってないため、各国レベルに適した教育普及が必要と感じた。この国は将来どうなっているだろう。工業、農産物などを国外へ販売する産業はなく、ほぼ自給自足に近い。何の問題から手をつければよいか分からない。予想以上に、治安がよく、観光しやすい。地形・気候・民族などを考慮すると、ネパールは観光業に適していると感じた。観光業に徹するならば、ゴミを拾うなど環境を良くする努力をするべきである。ゴミを定位置に捨てることだけでいいから、学校教育に取り組むべきだ。文化のあるところで政治に口をだすのでなく、環境問題に取り組むべき。

**メモ：**クマリ 汚れない少女。人間の姿をした神とされ、国や国王の運命を予言する。

**メモ：**カトマンズ 標高1300mの盆地に位置し、100万人暮らす首都。かつては栄光の都と呼ばれた。古くからネワール族が暮らし、都市文明を築いた。マッラ王朝時代、ネワール文化が花開き、寺院や記念碑が建てられた。

## 12月23日

5:45 起床。昨日よりよく眠れたが、何度か起きる。毛布2枚、掛け布団、計3枚で丁度よい温かさ。

7:00 ホテル出発。ゴミ箱はないが、なんとなく決められた場所にゴミを集めて掃除している人もいる。ゴミを燃やす為、町が煙りっぽい。ゴミを犬や牛が食べている。その一本の道のみきれい。ネパールでは象も

レンタルできる。

7:30 ポカラ行きのバスに乗車。川の両岸はゴミだらけ、廃棄ガスもひどい。都市部にたくさんの人があふれ、無職の人もいる。空き家も目立つ。女性も含め、警察隊が這い蹲って前進したり、ランニングしている。20分走ると町を囲むリングロードにでる。ここはカトマンドウの玄関口で人が混雑している。カランキから先が、シャハ王朝8代国王の名を冠したトリブヴァン・ハイウェイ。直線道路をしばらく走り、そのうち道が上りにかかるとカトマンドウ盆地ともお別れ。畑も目立つ。布団屋さん、家具屋さんもある。鉄筋でなく、レンガの家が目立つ。坂を上りきった峠がタンコット。峠を越えると、谷底へと道は続く。カトマンドウ盆地はかなり標高が高いところに開けた土地。つづらおりの道をゆっくり下る。山斜面に家があったり…いつしか山の中、更に進むと段々畑が広がったり、その繰り返しの風景。

9:30 最初の休憩。チャ 15 ルピー。ジャガイモとピーマンのカレー炒め。

いつの間にかハイウェイ右側に併走している川はトリスリ川。チベットに源を発する溪流。川に沿って大きなバザールを幾つか過ぎるとムグリンに着く。ムグリンはポカラとの中間地点で、タライ平原へとつながるナラヤンガート・ムグリン・ロードがはじまる交通の要綱。街道にそって食堂と宿が並ぶ。

11:30 ランチ（リゾートホテルでのビュッフェ）。

ここは亜熱帯地帯で、南国の蝶や鳥がいる。しかし、陰は寒い。

15:00 ポカラ到着。洋風の建物も目立つ。バスを降りると、宿やタクシーを紹介しようと片言の日本語を話す大勢の人が寄ってくる。タクシーでゲストハウスへ。

**メモ** ネパールは薄い石板が有名。屋根や道路に使用。だが、整地せず石やアスファルトを敷くため、アスファルトや石の道路はガタガタと盛り上がりっておりひどい。

15:30 湖まで出かける。近くのホテルには皇太子も泊まる。この辺りはお店やレストランで賑わう。

タクシーでヒマラヤ保全協会の office へ行く。パソコン、プリンタ、ファックス… office に驚く。英語の辞書もあり英語は必須。現地の方は4ヶ国語できるらしい。日本に住む会員への郵送は、日本からよりネパールから送る方が安いようで、郵便物をTさんが持ってきていたのに驚いた。ブラック・ティーを頂く。

17:00 タクシーでゲストハウス近くに戻る。地図を500ルピーで購入。夕食。

建物の入口ドアにマリーゴールドのような花の首飾りが飾っているが、祝いや旅へする人がいるとプレゼントするものらしい。この先、何度か頂くこととなった。ゲストハウスに戻ると停電。さっさと片付けて20:30に就寝。

## 12月24日

5:30 起床。

6:30 タクシーでトレッキング入口のナヤプールへ向う。温帯の植物・落葉植物。都会よりはるかにゴミは少ないが、目立つ。警察がジョギングしていたり、羊の群れ…。

8:00 ナヤプール到着。トタン屋根の店が並ぶ、トレッキング道の入口。ポーターを雇う。岩場を降り、川を渡り、30分歩いたところで朝食。パスポートを掲示し、入域料を払う。六甲山と同じような植物。全体に煙りの香り。

ナヤプールからは溪流モディ・コーラに沿って上流へ。途中、マオイスト（1996年からネパール政府に対して武力闘争を続けてきた）が独自で「トレッキング・パーミット料」＝寄付として徴収してきた。

正面にはマチャプチャレがそびえている。小さなバザールをいくつか通りすぎて20分も歩けばビレタンティに到着。モディ・コーラにかかる鉄橋を渡る前に、チャンドラコットからの道と合流。橋を渡ると、左手がゴレパニ、右手がガンドルンへの道に分岐。ビレタンティは川岸を中心に広がる村で、ロッジは十数件。



村をでると川に沿って緩やかな登りになる。30分ほど歩くとマタタンティ。集落を3つすぎて1時間も登ると、グルン族、マガール族の村ヒレに到着。

温帯で赤痢もなく住みやすい。ここから20分も歩くとティルケドゥンガ。

**メモ**：薪より農業開拓の方が、自然を破壊している。アマゾンには50年後は危険な状態となる。こちらでは傾斜がひどいが、すこしでも平らな地があると段々畑となる。岩・石が目立つ。道（幅3m）は砂でないので、歩きにくい。薄い岩は千枚岩。屋根や道によく利用される。岩が多いが、鉄やマグネシウムを含み、表面は風化しており、樹木に悪影響はない。

日差しがとてもきつい。

12:00 昼食。

**メモ**：毎年、土砂災害だけで200人死亡している。

傾斜がきつい。道にはやはりゴミが目立つ。トレッキングは予想以上に疲れる。死にそうだ。ティルケドゥンガのつり橋を渡ると難所。高度差600mの登り。石段が組まれていて登りやすいが、急。一時間も登ると、急坂の途中に山間にアンナプルナサウスもみえる。それから30分のぼる。

15:00 ウレリ到着。

ブラック・ティーを頂く。山奥へ入るほど、ミルクが貴重であり、ブラック・ティーが多い。ミルクティーというと、脱脂粉乳のようなパウダーを入れる。

Tシャツ2枚とも汗でビショビショだったため、シャワーへ。ソーラーだけだが、お湯がでて安心した。地元のトレッカー（地元でトレッキング出来るのはお金持ちの証拠）と火を囲んで団欒。米粒を焼いて、湯をいれたお酒をのんでいた。つまみは、羊肉を乾燥させたスクラ。固いが味がしみこんで、肉くさくなく美味しかった。ただ、食べ過ぎると、口の中が辛くなる。

18:00 夕食。

少し、筋肉痛。

20:30 就寝。寝袋は温かい。ぐっすり眠れた。

**メモ**：チョウタラ

木陰の休息所。方形に積み上げられた石塚にはインド菩提樹とベンガル菩提樹が対になって植えられている。ポーターは一人30kgとされているが、100kg担ぐ人もおり、荷物を下ろして一服するのに丁度よい高さ。トレッキング道には、おびただしい数のチョウタラがある。これらは、個人の篤志家が財をはたいて建造したもの。建造は、宗教上の功德を積む行為を考えられている。新しいチョウタラには、2本の苗木が植えられ、バラモン祭司がよばれて木と木の結婚式があげられる。葉脈の浮き出た、先の尖った丸い薄い葉つけたインド菩提樹。厚い長円形の大きな葉を光らせ、寄生木をつけて気根を垂らしたベンガル菩提樹。

## 12月25日

6:30 起床。昨晚、朝食を注文していたが、再び注文しないと料理されないというのんびり屋さんの国。山の奥は霞がかかり神秘的。こんな山の上なのに、何か違和感を感じる。きっと電線が目立つほどあるからだろう。

トイレは、備え付けられているバケツから水をすくい、洗う。常に、石鹸を持ち歩くスタイルに慣れた。ペーパーと使用するより、かなり衛生的。

7:30 朝食：トースト、オムレツ：平らな卵焼き。

ロッジの中は、中国のようなくさくさそうな飾り付けがある。

8:00 出発 森に入り、緩やかな登りを 1 時間でバンタンティ。ここは 10 分ほどの間隔をおいて 2 つの集落に分かれ、それぞれにロッジがある。農村からの荷物を運ぶロバともよく出会う。西欧のトレッカーも多く、みんな陽気。寒くて、手が凍る。冬の為、虫は少ない。夏にはヒルがいる。

**メモ** ハチミツ。山の上でハチミツがとれ、高値で売れる。煙りでとる。だが、水や砂糖を混ぜ込む悪徳業者もいる。そこで蛇を使って、本物が判断するらしい。

このあたりから、密林へとはいる。滝の音も聞こえ、空気おいしい。密林は 2～3 時間続く。道が湿気ている。木はコケに覆われ、シダも多い。自然に生かされている 感じがした。ただ、道には相変わらずゴミもある。「メリークリスマス」と挨拶してくれるトレッカーもいる。

**メモ**：地元の方で、ヒンドゥーからキリスト教に改宗する人もいる。貧しい人に多い。すれ違う中で地元の人は、都市部に農作物を運ぶ人がほとんどだが、奥地にヒンドゥー・仏教の聖地があり巡礼から戻ってくる人という。

**メモ** ネパール紅茶 お茶の主な産地は東ネパール。イラムティーが有名。北・西隣の村で栽培された茶は、ヒマラヤンティーという名でも販売されている。山岳・丘陵地帯で栽培される茶はリーフティーと呼ばれる細長い形の茶葉に加工され、豊かな香りが味わえるプレーンティーとして人気。一方、茶店でおなじみのミルク・砂糖をたっぷり入れて煮立て、スパイスで香りつけた濃い茶の味を楽しむ茶には、CTC ティー（Cut Xl る、Tear 裂く、Crush 粉碎）と呼ばれる顆粒状の茶葉が使われる。こちらはタライ平原などで栽培。ネパール内は、CTC 茶の消費が多く、リーフティーの多くは、インドを経由して、ダージリンの名で輸出されている。

11:30 ナゲタンティ。ヒマラヤの原生林がある。昼食。

一人でトレッキングしている日本人に 2 組と出会う。ネパールの山は野生のカラスがいる。日本にいるようなゴミを食べるカラスとは別。

13:00 ナゲタンティから 1 時間歩くとゴレパニ。ゴレパニは、下村（ゴレパニ）と上村（ゴレパニ・デオラリ）に分かれており、下村が先にみえる。下村のロッジは新しいが山々の見晴らしはみえない。あと 20 分登って上村へ。デオラリとは、峠という意味。

15:00 ゴレパニ着。

ジンジャーティーを頂く。シャワーを浴びに行く。暖をとる焚き火の熱を利用してお湯にしたもの。ただ、正直ぬるかった。だが、今日をすぎると、シャワーできる機会もなくなる為、寒かったがシャワーした。

18:00 夕食。

20:00 就寝。

**感想**：昨日より、慣れたせいかトレッキングに疲労は感じなかったが苦しかった。久しぶりにぐっすり眠れ、途中で起きなかった。

**メモ**：トレッキング

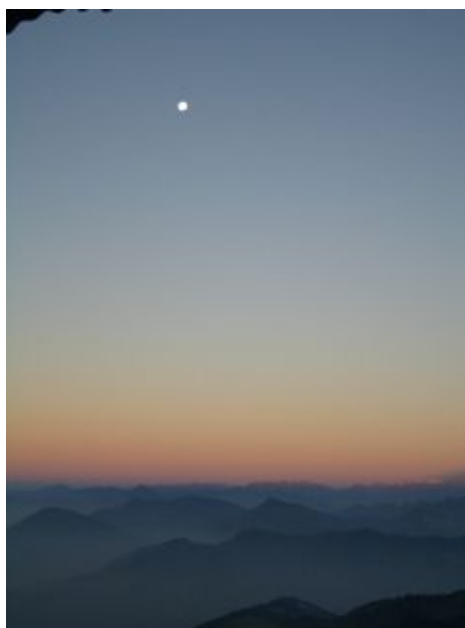


チキンカレーを注文したら鶏をさばいてくれた。

もともとオランダ語であった Trek（旅をする）が英語に取り入れられたのは 19 世紀中頃。Trek が頻繁に使われるようになったのは 1960 年代。開国して間もないネパール政府が、外貨不足を解消するために観光客誘致策として、ヒマラヤの山歩きをトレッキングとして宣伝し始めた。政府は、登山とトレッキングとを厳密に区別した。雪線を超える 6000m 以上のピークを征服することを登山、それ以下の山々を歩くことはトレッキング。登山家には、さまざまな制限を加え高額な入山料を徴収、一般道を歩くだけの観光客には気軽に来てもらえるようにした。

#### メモ：エベレスト

英語名のエベレストは、イギリス植民時代にインド測量局長官だったイギリス人、ジョージ・エベレストにちなんだもの。ネパール名は「サガルマータ」。宇宙の頭という意味。地元のシェルパは、大地の母という意味のチョムランマを使う。チョモランマは、日本の登山隊の中国側からのアタックなどを機会に、日本でも一般的に通用するようになった。公式には、8848m。エベレスト初登頂成功は、1953 年イギリス登山隊。しかし、1921 年にイギリスの第一次遠征に参加し、ノース・コル後に行方不明（1999 年に標高 8160m、遺体で発見）ジョージマロリーが登頂に成功したのではないかとされている。日本では、1970 年の松浦輝夫と植村直己。1975 年田部井淳子。



ヒマラヤが夜明けをむかえる。

#### 12 月 26 日

4:30 起床。

5:30 出発、テイクアウト用の朝食を作ってもらおう。

これまでは幅 3m の道であったが、ここからブンヒル（3198m）までは 50cm。登りがきつくなるので、死にそうなほど苦しい。一時間ほど歩く。雪も積もっている。

6:20 ブンヒル到着。富士山のご来光同様、人がたくさんいる。展望台もある。

風はきつい。空気がすんで、とてもいい景色。

6:50 日の出 チャをのむ。また、テイクアウトで持ってきたパンを一枚食べる。

7:30 出発 ここからは、登山道を離れ、村への道へと行く。道のない傾斜のきつい野をすすむので、何度か転ぶ。道は、雪や凍っているところがある。タイガーもいるらしく、道端に生えている草に、タイガーがかじった跡があった。一緒に歩いている NGO

スタッフのチットラさんは、猿も食べたことがあるらしい。

9:00 朝食。野原に座り、ゆでたまご、マサラ・ジャガイモ、トーストを食べる。もう冷えていたが、お腹すいていたし、目の前にみえる風景がすばらしく、おいしく頂けた。誰もいなく、澄みきった空、山、野原のみで、無音の世界。シーンという無音の音が鳴り響いているような感じだ。

ネパールの国の花であるシャクナゲが、どの山にも多くある。周辺の全ての木がシャクナゲという場所も多くある。3月に咲く。頂上から白、ピンク、赤という色の違いがみられる。

食べた後、幅に狭い道をまた歩く。銃と弓矢を持った現地の人に出会う。2年前まで 内戦があり、弓で人を殺害していたという。薬の木（癌を治す）も生えている。ネパール人の多くは、西洋の薬は使わず、木、葉からとれる自然の薬を使用する。ミツマタの木もある。

山を下り、ランチの場所となるラムチェへと向う。

昼食、村人の家に訪問し、食事を頂く。

ネパールではテーブルがなく、あぐらを組み、あぐらの上にお皿をのせて食べる。トイレは扉があって無  
いような感じで焦った。台所の流しのようなところがすぐ隣接してあり落ち着かない。

出発。山道を再び歩く。ラムチェからナンギ村がみえる。山を下り、更に登らなければならないことが分  
かり、かなりショック…。ネパールでは、移動するのに本当に時間がかかると実感した。

この数日間、Tさん、Yくん（ツアー参加者）、チトラさん（現地スタッフ）、ビルさん（ポーター）の5  
人でトレッキングしているが、歌ってくれたり、手品をしてくれたり、ネパール語を教えてください本当に  
楽しい。ネパール語と英語しか話さないの、とても勉強になる。歩いている途中で頂ける スンタラ＝オレ  
ンジ、キュウイは甘くてとてもおいしい。

16:00 ナンギ到着。遠方からの学生も利用している学校がある。宿泊施設もある。近年、インターネット  
のラインが敷かれ、苗木育成、魚養殖、ウサギ・カモの飼育、紙作成など、かなり発展した村である。その  
為、いろんな村から見学者がくる。その日も、見学者がきていた。

17:00 日が暮れる前に顔など洗うが、手がとても冷たくなる。

18:30 夕食。辺りはもう真っ暗。懐中電灯はあるが、生活しにくい。傾斜もきつところに建っているの  
で、生活するのに疲れる。停電しており、小屋の中でつまづいたり、何を食べているのか分からないぐらい。

19:30 就寝。板のようなところの上に、寝袋をひいて寝るので、寝心地悪いし、寒い。何度も起きた。

## 12月27日

7:00 子供たちと一緒に顔を洗う。朝食として、揚げパン、チ  
ャ、クッキーを食べる。

その後、授業を見に行く。インターネットの時間。朝は9時頃  
まで白い息がでるほど寒い。魚の養殖やウサギ・カモの飼育を見  
学。

畑ではタネイモを植えていた。6ヶ月ほどかかる。1株に 10  
個程ジャガイモになる。今後、雪が降るかもしれないので、今、  
植えているという。

保健センター：ドクターはいない。薬がおいてあるのみ。図書館。

12:30 出発。苗木が育成されているところに立ち寄る。

ロバはいなくなり、水牛のみ見かけるようになる。糞により、  
良質の肥やしとなっている道である。幅は一人歩けるかどうか。

**メモ**：マツは、アメリカのマツが生えている。家畜はマツを食べ  
ることができず、材木にも向かないので役にたたない。しかし、  
成長がよく、土砂崩れ防止にはよい。サクラは、材木に適し、貴  
重である。

小川の流れている道を飛び越えたり、岩をよじ登りながら進む。トレッキングより、登山に近い。死にそ  
うなほど、疲れる。途中で置いていってほしい…と思ったほど疲れた。

16:30 サリジャ到着。予想以上に大きな村。まず、学校の先生の家に訪問しチャを頂く。チャはかなり甘  
いが、甘さにも慣れた。手がベトベトするほど甘い。

村で歓迎会として、花の首飾りを頂く。ホームステイ先に行く。



ナンギからアンナプルナをのぞむ。





ホームステイ先のお母さん。

私のお世話になる家庭は 3 人家族。お父さんは既に死亡している。お母さん、娘（高校一年生）、息子（小学一年生）。お母さんは、肝っ玉母さんのようだ。娘の名前は、グマ。とても気さくな女の子で、何でもお世話してくれる。トイレは、家から離れていることもあり、友達と 3 人で連れて行ってくれた。ネパール語も教えてくれるし、私のネパール語をじっくり聞いてくれる。

夕方、夕飯。

床は土。木の板の上に寝袋を敷く。実に寒い。

19:30 就寝 これまでの中で最も眠ることが出来なかった。

## 12 月 28 日

7:00 起床。ブラック・ティーを頂く。ミルクは貴重である為、ずっとブラック・ティーである。大変甘い。嬉しいことに、ライムを搾ってくれる。さわやかな味となる。

朝食。

メモ：

A 半農（稲作）半牧：ヨーグルトにお米を混ぜて食べる。ネパール。

B 半農（小麦）半牧：パン（小麦）にバターを付けて食べる。ヨーロッパ。

C 半農半魚：米の上に魚をのせて食べる。（寿司）日本。

インドでは、お米もパン（ナン）を食べるが、東の中近東ではナンのようなパンばかり食する。間の西ネパールでは、雨が少なく、農作物も貧しい。その為、朝はお米、夕方はナン＝小麦を食する。中央・東ネパールは、朝食も夕食も米である。

10:30 苗木育成を見に行く。



村人とともに植樹をする。

これまで 50 ヘクタールに 1 万～1.5 万本植樹してきた。苗畑センターがうまく機能するまでには、10 年要する。：3 年目から自立に向けて育成し、5 年目でセンターが落ち着くようなプログラムにしている。他の村にも苗を買ってもらい、森が広がるのが理想だ。

森の土とベニから買ってきた砂を混ぜて土をつくる。夕方に水を撒き、夜は、上からござをかぶせる。

植樹へ。

2 本の植樹をする為に山をかなり登った。どこまで登るの…と何度も思わせるほど山に登った。岩・石だらけのため、穴を掘るのもやっと。何万本植えることはかなり困難を要



ステイ先の食事（ダルバート）

すると感じた。大体は雨期に植える。しかし 3 割は枯れるという。マツは、日向用。ハンノキは日陰用。どちらも家畜は食べないが土砂災害防止によい。段々畑は一年も放棄されると土砂災害を招く為、再び森へ返す為植樹する。また、植樹した後、家畜に食べられないよう、塀を造るのも、作業の一つ。こちらも大変である。

毎日、アップダウンのひどい傾斜ばかり歩いている。しかも、距離がある。過酷なトレーニングに来たかのような旅である。しかも、日差しがきつい。

帰りに、Yさんのホームステイ先を訪問。ヨーグルト（ラッシー）を頂く。私のホームステイ先で頂く味を異なる。また、チャも頂く。かなりマサラがきいている。こちらの家庭は裕福だそうで、家の中で、クッキーやお菓子が販売されている店のようだ。しかも、ご飯に卵がでてきたそうだ。卵は貴重であり、私のホームステイ先の食事には一度も卵料理はでてこなかった。Yさんの家でチャがでてきて、ミルク入りのチャが飲めたのも裕福だったからに違いない。

メモ：民族は大きく分けると、

- A アーリア（ヨーロッパ）
- B モンゴロイド
- C アフリカ

日本人とネパール人は、同じモンゴロイドなので、大陸の人々と生活スタイルが似ている。

今回のホームステイ先は、マガル族であるが、ネパール・インド辺りは、いろんな民族をみることができる。民族が多数交じり合っている為、紛争も多い。

メモ：バングラデシュ

インドをヒンドゥー教の国とするため、他宗教の人を追い出した。その結果、イスラム教の人がバングラデシュに逃げ込み、バングラデシュは、イスラム教の国となった。

16:30 ホームステイ先に帰る。サトイモを生で食べる。おやつらしい。最近、にんにくをたくさん使用した料理ばかりなので、体がにんにくくさい。

18:00 夕食。昨日の夕食、今朝の朝食と全く同じ具のダルバート。飽きてきた。

## 12月29日

7:00 起床。

お母さんの友達が何人かやってきた。タネイモから長い芽が出ている為、芽とりをしにきたようだ。お手伝いをした。

また、シコクビエを売りにきた。

ネパールは、土曜日がお休み。子供たちは、学校がお休みの為、お母さんと山を越えた場所まで行った。

10:00 手作り織物を販売しているお店を見学後、織物現場へ行く。

染めるときは、顔料の他、塩を入れる。顔料は、カトマンズで購入。樹皮から繊維をとり、繊維から糸を紡いで、糸から布をつくる。

今の織物現場は、他人から場所を借り、また、狭い。そこ



糸紡ぎを見学する。

で、只今、新しい小屋をつくっている途中である。

家の塀は、千枚岩と砂岩とどろである。日本の技術で小屋を作っても、先々、メンテナンスができないので、ネパールの技術で小屋をつくっている。

ただいま、常時 3 人でやっている。布を売ったお金で苗木を購入し、木が育つと木から繊維をとり、糸を紡ぎ、布をつくる。その繰り返しである。持続できる環境である。

#### メモ：フェアトレード

バングラデシュで活動しているシャプラニールは、フェアトレードをしている。

同じように布を織っているが、日本などの先進国に販売する為。特に、日本の女性をターゲットとしており、ターゲットの流行を入念に調べている。現地の女性の雇用を確保し、収入としている。ただ、外国に販売する為には、販売ルートの組織もつくる必要とされ、かなり大掛かりである。

織物をつくる現場を見終え、村のミーティングをしている場所を向う途中、祈祷師をみた。祈祷師の団体は、いろんな地域をまわっている。最近、ネパール空港の機体が壊れた際も、祈祷師が「ヤギのいけにえ」をするよう指示したため、2 匹のヤギがいけにえにされている。

ミーティングでは、地元の NGO が村の現状を 20 人ぐらいの村人から聞いているところであった。ネパール政府が機能していない為、地元の NGO や軍隊の OB が動かなければ、村はよくなるらないのだ。ちなみに、軍隊の OB は、お金持ちである。選挙も NGO が治安を見守っている。

今後、サリジャ村でも紙をつくろうと考えているようだ。次に、紙をつくる現場となる小屋を見に行った。まだ、小屋しかない。その後、ホームステイ先に戻った。家族は、帰ってきており、また、親戚もきていた。

17:30 夕食。初めて、肉類がでた。「今日は肉だよ」と家族はみんなよろこんでいた。

お母さんは、親戚の家に泊まりに行ったようだ。代わりに、おじいちゃんがきた。毎晩、夜は、電気がない為、竈の火を暖として、家族が集まっている。そして、20:00 には就寝する。日本では失われた姿だ。

20:00 就寝。

## 12 月 30 日

7:00 起床。グンマといここは、ベニという町に行った。片道 3 時間歩くらしい。日本人が歩くと片道 5 時間はかかる。

10:30 村人とミーティング。Y さんは、どうやら病氣らしい。

ミーティング内容：

A サリジャ村は、1,299 ヘクタール。4,000 人の住人。

女性の方が多い。

B ジャガイモ、ブロッコリー、人参、キャベツ、カリフラワーなどを栽培。

C 土砂崩れはおこる。

D 電気と道が無いのが、一番の問題。来年には、政府が電気を敷いてくれる予定である。

E 只今、10 年生までの学校しかない。それ以上は、かなり遠くの学校まで歩く必要がある。なので、学校が必要

F サリジャ村には、7 月から 11 月までの間に 1 万本の植樹が行われた。

G 葉をつくるマシンが欲しい。ただ、マシンを動かすには、先ず、電気が通じる必要がある。葉といっても、西洋の葉ではない。木の葉をペーストにした葉である。

このように、現状を把握し、村人のニーズも把握。その上で、必要と思う技術協力の実践をはかる。計画

の実績、環境に与える評価など、事後評価もする。

日本の文化の紹介として、村人の名前を筆ペンで漢字表記した。

その後、糸をつくるまでのビデオをみた。

**メモ：**糸のつくりかた

1. 木をきる
2. 樹皮をとり、水につける
3. 樹皮をたたいて、灰のはいた水で 2 時間煮込む。5 kg の樹皮から、1kg の繊維がとれる。
4. 乾かす
5. たたいて、柔らかくする。洗い、乾かす。

13:00 ホームステイ先に戻る。茹でたジャガイモをおやつとしてブラック・ティーを頂く。久しぶりに、髪の毛を水で洗う。手が日焼けしたことが気になる。グンマがベニから帰ってきた。オレンジやキャンディーをもらう。

18:00 夕食。今晚は、最終日のせいか、マトンを用意してくれた。その他、ラーメンもつくってくれた。

19:00 就寝。マトンのおいと筋肉痛と寒さで、気分悪く、なかなか寝付けない。あまり眠れなかった。

## 12月31日

6:30 起床。朝食として、パン、ビスケット、オレンジ、ブラック・ティーを頂く。いよいよお別れ。首飾りをもらった。

8:00 学校の先生の家で村人とお別れ会。またまた、首飾りを頂く。かなり、首が重い。

8:30 出発。歩いて、先ず、ベニへ向う。5 時間はかかる。ワラで造られた家がまだあった。

カリガンダキ川。カロ=黒がにごり、カリとなった。ガンダキ=川。チベットから塩を運ぶ交易路の川。

**メモ：**菩提樹

葉の先がとがっているのが特徴。仏教の聖地に大きな菩提樹があった。日本の考古学者は、調査の為、木を切り倒した。仏のいた頃より後の育った木であったが、現地の人は昔からあった木と思い込んでいたので、かなり怒っている。日本人は、その倒した木で、数珠をつくったと言われている。

13:00 ベニ到着。チャとヌードルを頂く。久しぶりに卵を食べた。チットラさんの親戚の店らしい。

13:30 出発。タクシーでナヤプールに向う。ガタガタの道で、乗り心地がかなり悪い。体全体が痛い。

16:30 ポカラ着。ゲストハウスに戻り、久しぶりにシャワーを浴びる。電気はつくし、温水を浴びることができ、本当に幸せを感じた。本当に気持ちよかった。温水のありがたさをしみじみと感じた。

18:00 ポカラは、多くの観光客が集まる観光地。その為、ネパールでは見かけることの無い、ニューイヤーイベントとして夜店がでていた。ネパールの新年は 4 月であるため、ポカラ以外では、ニューイヤー行事は全くせず、普段通り動いている。

## 1月1日

7:30 起床。

8:00 朝食。

ミーティング：



ネパールは標高差（800m～8000m 以上）がある地形である。その為、このヒマラヤトレッキングでは、多様な環境・文化に出会える。富士山を登山しても、これほどの多様な環境をみることはできない。

バフンチェトリ：ヒンドゥー教。稲作農耕文化。ムガル帝国がインドを攻めたときに逃げてきた人々。

マガル族：ホームステイ先の人々。トウモロコシを食するが、今は、米も食する。チベット：ゴレパニで売店をしていた人。黒い服に前掛けをしている。グルン族は、Birethant からウレリまで、マガル族はウレリからゴレパニまで、チベット族は、ゴレパニから上部に住んでいる。食べ物や道具は、族により異なる。

A. ネワール文化は、インドともチベットとの文化とも異なる。歴史も異なる為、インドは占領できない。

中国とインドは仲が悪く、インドがネパールを攻めることを中国が許さない。

B. 多種民族があるが、全ては、決して混血などしない。文化も全て異なる。しかし、ネワール族だけは、唯一、混血がある民族である。食文化も融合されている。たとえば、カレー味（インド）のやきそば（チベット）

C. 500 年から 100 年前にネワール族が反映し、上下水道などをはじめ、都市国家ネパールをつくった。しかし、今は、危機遺産に指定されている。

D. 都市国家は、世界には、アテネ・ローマ・インド…をはじめ、全ての地域では滅び、遺跡になっている。しかし、ネパールは唯一、遺跡にならず、残っている。都市国家で、まだ、人が住んでいるのだ。人類史を考察する上で、標本となっている。

E. 都市国家=文明のはじまり。

1、いくつもの都市国家ができた。（国境はない）

2、200～250 年前には、一部の国家が強くなり、領土国家=帝国主義の時代となった。国境ができた。

3、現代は、領土国家で、必ず国境がある。国境の無いところでは、紛争がおきている。

F. 標高差により、多様なライフスタイルがある。

G. ゴミを集めない。保健衛生の問題が気になる。

これまで、ネパールには、ビニル製品が無かった為、道にすてても、土に還元されていた。しかし、ビニルが外国から入ると、道に捨てる習慣が残っているので、ゴミ問題が浮上する。ゴミ処理施設もなく、ゴミは溜まる一方である。中途半端な温度でゴミを焼くと、ダイオキシンが発生し、悪影響があるので、郊外の空地に埋めるしかない。ゴミ捨て場はない為、なんとなく集めている程度。

ナンギ村では、ドラム缶を配置し、ゴミを集めるよう習慣づけするプロジェクト をしている。研修トレーニングが必要である。

**感想：**ゴミ処理施設をつくるべきか、ビニル製品である包装紙が土に還元されるような開発をするべきか。ゴミ処理施設をつくっても、奥地の村からゴミを毎回運べるかは分からない。また、ネパールだけでなく、アフリカや他アジアでも同じ問題はあるであろう。土に還元される包装紙を開発することは、多大な費用を要するが、世界中のこと、将来性を考えると有効であろう。

H. 植林をし続けることが大切。環境保全。

I. 日本人が失ったもの・ことをネパールは持っている。

ネパールあって日本にないもの。日本にあって、ネパールにないもの。

電気がないため、竈の火を中心に家族が集まり、暖をとっている。テレビが普及すると、家族の団欒がなくなる。文明が入ると、ライフスタイルが変化する。日本は、便利さと引き換えに、失ったものも多い。

星空がとてもきれい。このような星空は、日本でみることはできない。

J. 雄大な自然があり、人間がちっぽけに見える。

- K. 電気のありがたさを感じる。
- L. 水道や電気がなくても生活できる。日本では、過剰に使いすぎているように感じる。
- M. サリジャ村の方が、ナンギ村よりも先に存在していただろうが、文明は、ナンギ村の方が発達している。ナンギには、優秀なリーダーがいるからだ。
- N. 多様なライフスタイルにふれると、多様な価値観を得ることができる。
- O. 12年前より、1,500ヘクタールに65万本植林してきた。だが、世界では、植えるよりも、使用＝伐採される木の数の数が多い。植えることにより、放棄された耕作地を含め、傾斜の土砂災害を防ぐことができる。山岳環境を守っている。インドやバングラデシュなど下流域の水の供給の保護にも役立っている。
- P. 環境問題は、人口増加の問題とも関連している。人口が増えると、耕作地も増える。その為、耕作地用にと、森林が伐採されるのだ。
- Q. 木の無いところに植林の文化をつくり、継続していくことが必要だ。植えることにより、人間が自然環境をつくるのだ。自然は、本来、ナチュラルの意味であったが、これからは、人為的な意味になるであろう。
- R. 紙をつくることは、村の現金収入となっている。この現金収入で、苗を買い、植林ができる。だが、紙をつくることは、2～3人でできる為、雇用増加にはつながらない。
- S. ネパールの産業は、観光・トレッキングが適している。
- T. 村にお金が必要とされるのは、子供に学校へ行かせる為である。ノート代の他、高学年になるほど、遠方を理由に Hostel 代金(食費含め)を要する。教育が普及するほど、家計は苦しくなる。村では、農作業をする力もなくなり、若い人が帰ってこないため、過疎化する。町に職がないと、出稼ぎに外国へも行く。
- U. 香辛料(スパイス)のきいた、味も心にも刺激的な旅であった。
- V. 亜熱帯の地域でも、陰は寒い。まだまだ知らない自然環境がたくさんある。自然は雄大である。
- W. 日本を再確認できた。日本は島国であり、融合も衝突もないが、それは弱さでもある。融合により、新しいものも生まれにくい。日本は便利さと引き換えに失ったものも多い。発展だけが良いものではない。多くの人が幸せになるのがよい。
- X. イラクサ：繊維、ロクタ(ミツマタ)：紙。

11:30 二人でポカラ散策へ出かける。

**メモ**：ポカラは、カトマンドゥから西へ 200km。フェア湖とアンナプルナ連邦の展望で知られ、ヒマラヤに端を発する溪谷が開いた緑豊かな盆地である。標高は 800m で亜熱帯らしい雰囲気が漂う。ここから 8000m 級のヒマラヤを直ぐ近くに仰ぎ見ることができ、その高度差は世界でも例をみないであろう。

アンナプルナ連邦のうち、正面に見えるのがポカラの象徴でもあるマチャブチャレ。「魚の尾」の意味で頂上がふたまたに分かれている。

ポカラという地名は、池を意味するネパール語「ポカリ」からきている。湖のほとりは、観光地。もともとポカラの町は、北のチベットと南のインドを結ぶ交易路にあるバザールだった。年平均 3500mm 降雨量。人口 15 万人。

道に迷い、通りすぎたが、みんなが親切に教えてくれた。

グプテシュワール・マハーデヴ洞窟：10年ほど前までは付近の住民が川で釣りをする程度の場所だったが、ひとりの修験者がこの洞窟にシヴァ神の像が眠っている夢をみて内部を探索したところ、像が見つかったと言われている。洞窟に入ると発見された像を祀った小さな寺院があり、さらに奥には川の水によって侵食された鍾乳洞が続いている。一番深い所では高さ 5m くらいあり、雨期には天井まで水が達するという。乾季な

ので、パタレ・チャンゴの滝を下からみることができた。

これまでのトレッキングに比べ、平坦な道であり、距離も短いがすごく疲れた。

15:00 ゲストハウスに戻る

17:30 夕食 チベット料理を食べに行く。

#### 感想：

- A. 都会では、先進国に追いつこうとし、コンクリートの建物が並んでいる。
- B. だが、表面的なものだけをとりあえず揃えている感じがあり、質が悪い。アスファルトの道路でも、ガタガタである。
- C. 質の悪いものを揃え、環境を破壊するより、環境を守り、自然をそのままにしておく方がよいと感じる。
- D. 国がどの方向に進むかは、その文化と地理風土を知り尽くしているネパール人が考えることである。環境が失われず、文化が壊されず、マイナス影響を最小限にとどめることができるよう見守るのが、先進国の義務である。
- E. 経済・文化のグローバル化で、自給自足のスタイルが崩れ、お金がないと生活出来なくなっている。文化も衰退。
- F. 環境保全と地元の資源を生かし、風土に根付いた豊かな地域づくりが大切。村人に教え、教えられ、互いに学びあう。

22:00 就寝。ネパールは暖房器具がないため、寒い。

## 1月2日

7:15 ホテル出発。

8:00 カトマンドゥ行きのバスに乗る。朝は、どこでも霧がかすんでいる。20~30m 先が全くみえない。

11:15 昼食。

12:00 出発。ここで、チトワン行きのバスに乗れば、ジャングルにも行ける。

ポカラ⇄カトマンドゥは同じ道をバスで走っているが、「川にかけている橋はすごい」ということを、帰路のみ感じた。往路では全く感じなかった。恐らくアップダウンを足で歩いて移動したことで、橋を少しでも移動を楽にさせるものとして実感できたのだろう。

**感想：**今回の旅行で、何ができたか。人の役にたつことができたか不安である。何もできなかったが、観光することにより、ネパールに収入をもたらすことができた。これだけだが、役にたつことができたと感じている。この国にもたらすことができたお金が土砂災害防止につながれば幸いである。

今のネパールの政治システムでは、ゴミ処理施設を設けてもうまく機能しないかもしれない。先進国の真似をしようとして、追いつこうと必死になっているのを感じる。真似しても、かなり質が悪いもの だけができるだけだ。発展のみを目指すのではなく、その国に適しているものが必要 だ。

貨幣経済がすすむと、山岳民族は移動に時間がかかる為、一層不利になる。都市部のみ観光業が発達するのでなく、村にも観光客が来るよう、村を紹介したいと心から感じた。

ネパールは、食べ物もあるし、決して貧しい国ではない。バングラデシュの方が貧しい。しかし、貧しさの表す一部の指標によれば、ネパールはバングラデシュよりも貧しいという結果もでていいる。なぜか。ネパールは、先進国に追いつこうとするばかり、質の悪い文明を作り上げ、環境破壊がひどい。能力が伴っていないのに、表面上ばかり良くしようとしている。排気ガスがひどく、人体にも悪影響。ゴミがあふれ、保健

衛生上よろしくない。それに比べ、バングラデシュは、土に還元できないゴミに包まれたお菓子やラーメンもないので、ネパールほどゴミは目立たない。私は、これが、ネパールが最貧国として表される原因と考える。

視野を広げ、この問題を考えていきたい。

16:00 カトマンドゥ、フジホテル着。家に帰ってきたかのような気分だ。

16:20 一人でスワヤンブナートに出かける。タクシーでぼったくられるか心配だったが、無事に 100 ルピーでいけた。階段を登っていく。かなり急でしかも段数は 335 段と多い。途中休憩しながら登っていった。猿もいた。入場料は 100 ルピー。かなり階段を登ったところにある為、見晴らしはよい。

カトマンドゥ盆地がまだ湖だった頃から丘の上に建っていたという伝説をもつ。階段を登るとストゥーパの正面にでる。ここには巨大なドルジェ（金剛杵）が安置されている。金剛杵は無明を打ち砕く雷で、真言宗でも使われる密教の法具だ。ストゥーパの側壁に、密教の本尊仏大日如来（毘盧遮那仏）像が安置されている。大日如来はスワヤンブナートの開基に深いかかわりがあり、伝説として以下が語り継がれている。

「太古、神々のおおすヒマラヤの麓に、青空を映して輝く大きな湖があった。その湖の真ん中の島に咲く蓮華から、あるとき、大日如来が姿を現した。その頃、中国の五大山にいた文殊菩薩は、チベットを経てインドへ帰国の途につこうとしていた。しかし、旅の途中でヒマラヤの湖の不思議を知った文殊菩薩は、大日如来に敬意を表すためにこの地に足をむけた。土地の人々が 湖に住む大蛇の悪行に苦しめられたことを聞いた文殊菩薩は、携えていた利剣でチョバールの山を切り開いた。怪物は湖水とともに消え去り、人の住める肥沃なカトマンドゥ盆地があとに残った。文殊菩薩は、小高い丘となった島の上に大日如来への奉納としてストゥーパを建立し、後にゴータマ・シッダールとして生まれ変わる大日如来を万物の創造者として称えたという」

伝説は、往々にして事実を含んでいる。カトマンドゥ盆地がかつて湖であり、盆地南部のチョバール村付近の山が崩壊しこの地域の水系が激変したことは、近年の地質学が研究によって証明されている。

寺院の開基が伝説とおりとすれば、スワヤンブナートはいわばヒマラヤ最古の寺院。

ストゥーパを時計周りに歩く。右回りは、原始仏教以来の作法。

境内には、いろいろな建物がある。ストゥーパの手前両側には、インド・シカラ様式の仏塔が建っていて、スワヤンブナートに独特な印象を与えるデザインの要素となっている。また、ストゥーパの右側にはチベット仏教カギユ派のゴンパ（僧院）、背面には 1 階が吹き抜けになっている巡礼宿と木造の小さなハリティ寺院がある。巡礼宿前にはヒンドゥー教の女神ガンガとヤムナーの像があり、ネパールの宗教的多面性がうかがえる。

スワヤンブナートは 13 世紀までにカトマンドゥ 盆地で最も重要な仏教の聖地となり、15 世紀のイスラム教徒侵入時に大被害を受けたがその後再 建され、また 20 世紀後半には中国の武力侵入で故郷を追われたチベット人達が周辺にすみつくようになった。

暗くなるとひたくりになるかもしれないと思い、早く切り上げて階段を降り、戻っていく。階段をおりたところで、タクシーに乗り、お土産を買うため、お店まで行ってもらう。

ニーム石鹸が有名らしい。マッサージオイルを含め、1010 ルピー使ってしまった。

店を出ると暗く、地図をみてホテルに向った。途中、数種類のマメ（大豆、グリーンピースなど）と、それを炒るための真鍮製の壺、壺の中のマメをかき混ぜる竹ほうきの先のようなものをのせたリヤカーに出会う。20 ルピーで 3 種類のマメをミックスしてもらい、夜ご飯にした。

お土産を買いすぎたため、1,000 円をルピーに両替してもらった。

メモ：チュウラ

チュウラ=焼き米。粳付きの米をボイルしてからいったん天日干し、乾燥したものを大鍋で煎ってつき、殻を取り除いたものだ。カトマンドゥ盆地土着のネワール人の宴席料理に欠かすことができないもの。

18:30 ホテル着。部屋に着くと停電していた。

20:10 電気復活。計画停電のようだ。



市場の岩塩屋さん。

## 1月3日

6:00 起床。

7:40 ホテルから一人で出かけ、ベーカリーへ行く。ブラック・ティー、ヨーグルト、スープ&ブレッドを頂く。

9:00 ホテルに戻り、3人で市場で買い物に行く。

10:50 ホテルに戻る。

11:00 出発。サブバックだけで 10kg あった。タクシーで空港に向う。空港内のショップには、ネパールの土産物は売ってなかった。

**感想：**ネパールは観光業を主産業とするならば、ネパール

独自のお菓子のお土産などを提案してもいいかと思った。

手荷物検査はかなり入念だ。サブバックの中身を一つ一つ検査された。岩塩を凶器として見られ、取り上げられそうになった。価格も聞かれた。

空港内には、フライト時刻を示す電光掲示板はない。スタッフが搭乗のお知らせをしてくれるが、ネパール語の為、役立たない。

メモ：カーストは職を表している。生まれたときから、職が決まっている。

14:50 フライト出発は 1 時間遅れた。TG320 でバンコクへ向う。

昼食。

19:20 バンコク到着。空港で残りのパーツでお土産を買う。

22:35 TG640 で成田空港へ向う。夕食。

## 1月4日

6:20 成田空港到着。

成田空港から、羽田空港行きのリムジンバスに乗る。

9:20 羽田空港から神戸空港へ。

神戸空港で家族でビーフシチューとトマトサラダを頂いた。

## VII. 参加者の感想

### 1. 「関心」が地球を救う

K. Y.

人は、一人で生きることはいできない。人と人が交わり合う他、人は自然と共に生きている。いや、自然によって生かされているといってもよい。だが、人は自然と共に歩いていく関係であるにもかかわらず、自然を破壊し、温暖化現象を肌と感じとれる程、甚大な環境破壊をもたらしている。将来、自然・人が存在し続けることも危ぶまれている。

そこで、こうした状況から抜け出そうと、ちっぽけな私は一人、何とかしようと試みる。もちろん、何もできない。だが、何もできないと諦め、無関心でいることだけは避けたい。環境問題に無関心でいることが、最も環境破壊であると考えているからだ。では、何から始めるべきであろうか。行動すると何かを見出せるに違いない。そこで、私は、先ず、現状を知るべきであると考え、第14回エコロジースクールに参加した。

ネパールは、「ただ、ヒマラヤ山脈がある国」という印象を持っていた。だが、実際訪れてみると、これまでのイメージが覆された。ネパールは、実におもしろい国であるのだ。多種民族が存在するにもかかわらず、紛争をおこさず、民族が各々の文化を持って生活しているのだ。標高によって住み分け、食べ物、調理道具、味まで見事に異なる。また、標高 800m~8000m までの多様な気候が存在する為、動植物の種類が豊富である他、人間をの暮らしも多様であるのだ。カトマンドゥ盆地を除いて、文化は決して混ざることではなく、他国のの人々にとっては、自然の原理、動植物の暮らし、自然環境について考える参考資料となる。また、多種民族が暮らす参考資料：ネパールは、民族の交わりからおこる紛争をはじめとした国際政治の問題を考える上でも参考となる。ネパールの主産業は観光業となっている程、おもしろい国、ネパールを実際に感じてみようとする人は多い。重要な外貨獲得手段であり、かつては、取得外貨の 20%を占めていた程、世界中から多くの観光客が訪れている。

だが、ネパールに足を踏み入れてみると、魅力ある自然・文化の他、大量のゴミの景色にも直面する。道・川など視界に入る全ての場が、ゴミで溢れているのだ。ゴミ処理施設がない所に、ビニル製品の物が輸入されている為、ゴミの景色は一層ひどいものになるであろう。保健・衛生問題だけではない。ヒマラヤでは、地球温暖化の影響で決壊による洪水の危険性高まっている。人口増加により田畑開拓・森林伐採が行われる為、土砂災害を招き、毎年 200 人死亡している。貨幣経済が浸透し、子供の学費を稼ぐ必要がある為、移動に多大な時間を要する山岳民族の暮らしは一層貧困が増しているという。また、保健医療の質が悪く、女性が男性より平均寿命が短い世界唯一の国でもある。こうした多大な問題を抱えるネパールは徐々に悪い方向へと変化し続けている。悪化し続けると、観光業にも影響を与え、ネパールは一層貧困がすすむに違いない。

このような状況をそのまま放っておいてよいものか。貧困が増すだけでない。自然破壊が進行すると、ヒマラヤの氷河湖が決壊し、下流地域に住む人々の生命を奪う。ネパールだけでなく、アジア全域、世界各地で人間が住めなくなる地域が増えるのだ。世界がこうした状況であるにもかかわらず、私たちは、水や電気、割り箸やビニール袋を大量に消費している。なぜ、人は、環境保護に積極的に取り組まないのか。



今回、ネパールを旅し、周囲に旅の内容を報告することで気付いたことがある。それは、多くの人がネパールのことを知らないということだ。「ネパールってどこ？アフリカ？」「寒い地域なんかあるの？暑いところだと思ってた」「何を食べるの？カレーを食べるの？」ネパールを全く知らない。「インドの上に位置すること」、「ヒマラヤ山脈があること」さえ知らないのであれば、「ゴミが溢れて保健衛生であること」、「土壌開拓の為、木が伐採され、土砂災害を招いていること」、「氷河が解け、水害被害の危機であること」は全く知られていないだろう。現状を知らないから、危機感を感じるができず、水、電気、割り箸やビニル袋を大量消費していると考ええる。無関心こそ恐ろしいものはない。無関心は、自然破壊を招くのである。現在、社会が「エコ」と叫び、環境保護活動が少し見受けられる程度であり、実際に、環境破壊の現状を知らなければ、危機感を持って、環境保護活動に取り組むことはないであろう。まずは、関心を持つことが、地球環境を救う最大の手段といえる。

環境保護の為に、今、私にできることは何であろうか。まずは、多くの方々にネパールを知ってもらいたい。ネパールに興味を持つことは、環境保護につながる。また、ネパールへの興味から実際に旅し、それがネパールの観光収入にもなる。興味・関心を持つということは、環境保護や貧困化の食い止めにつながるのだ。

実際、私は、ネパールを訪れる前と後では意識が違うように感じる。これまで、新聞やテレビをみても気付くことのなかったヒマラヤ情報を気にするようになったのである。「ヒマラヤ温暖化 水力発電の限界」「ヒマラヤ 氷河湖決壊を早期警報。危険水位を携帯に配信」など。関心を抱くことでヒマラヤ情報を多く目にとると、温暖化への意識からであろうか、環境破壊に危機感を自然と感じるようになった。「節電・節水」、「エコバック・マイ箸の利用」、「服を着重ねることにより、暖房を利用しない」などの身近なことから取り組むようになった。

環境破壊を食い止めるには、多くの人が関心を持ち、現状を把握する必要がある。今、私にできることは何か。多くの人に関心を持ってもらえるよう、環境破壊、自然の素晴らしさ、ネパールの良さを語っていくことだと思う。多くの人が関心を持つことで、地球の現状を把握し、人間と自然がともに歩める社会をつかっていきたい。



## 2. 「出会い、心が通じ合う喜びを実感できた旅」

Y. Y.



私が今回のスタディツアーで得た最も大きな収穫、それは「出会い、心が通じ合う喜びを実感できた」ことだ。2週間という長そう  
で短い期間に、私は多くの人々と出会い、楽しい時間を共有することができた。ウレリやゴレパニのゲストハウスの女の子たち、イギリス人旅行者とそのポーターさん、私たちのポーターをしてくれたベンさん、IHC ネパールのチットラさん、サリジャ村の皆さん、挙げるとキリがない。彼らとは言葉を通じたコミュニケーションは情けないことにほとんど取れなかった。だが、不思議と彼らが伝えようとしていることは伝わってきたし、私の伝えようとしていること

も伝わっていた。

言葉というものは意思疎通のためのツールの1つでしかない。当然言葉を通して、もっとたくさんの情報を共有し合うことが出来たならば、もっと充実した旅になっただろう。だが、言葉以外のツール、例えばスポーツや酒、ジェスチャーや表情をフル活用すれば、お互いに楽しい時間は共有できるし、心は通じ合うのだ。スポーツに関して言うと、1つのボールをみんなで泥だらけになりながら追いかけていると、一緒に笑い、「楽しい」を共有できるのだ。国籍や人種、民族などの小さい枠を飛び越えて通じ合える、その友情の輪の中に私が存在できた。本当にいい経験だったと思うし、ネパールで得た最も大きな喜びだった。

言葉を超えて、心が通じ合えたと思えた体験を数多く出来たこの旅は、私にとってかけがえのない経験となったことは間違いない。この経験を日本に帰って生かすも殺すも自分次第。自分の中でもっと大きなものに育てていきたい。







ブンヒルにて。中央の人物は、ヒマ  
ラヤ保全協会のネパール人スタッフ  
のチトラ=ブンさん。背後はアンナプ  
ルナ。



参画型アプローチ「KJ法」をつかっ  
て情報を整理する。



亜熱帯の楽園・ポカラからアンナプル  
ナをのぞむ。

第 14 回 山岳エコロジースクール 報告書

発行日 2008 年 12 月 1 日

発行者 特定非営利活動法人ヒマラヤ保全協会

〒151-0053 東京都渋谷区代々木 3-5-7 シグマロイヤルハイツ 403

E-mail: [ihcjpn@ybb.ne.jp](mailto:ihcjpn@ybb.ne.jp) TEL/FAX:03-5350-8458 <http://www.ihc-japan.org/>